

於 大槻能樂堂

2019年
5月19日(日)
午後1時始(開場正午)

第三十四回

正陽会

たかさご
上野朝彦

能 高 砂

狂言 茶壺 茂山七五三

舞囃子

三

笑

さんしょう

野村四郎
上野朝義
上野雄三

能

船弁慶

ふなべんけい
上野雄介

入場料

前売り 一般 5,000円 学生 2,500円

当日 一般 6,000円 学生 3,000円

チケットのお取り扱い・お問い合わせ

大槻能樂堂 06-6761-8055

朝陽会館 06-6357-0844

info@choyokaikan.com

主催 / 正陽会 (じょうようかい)
上野朝義 上野雄三

写真提供
ウシマド子寅工房
森口ヨシ

第34回 正陽会

2019年5月19日(日)午後1時開演 正午開場
於 大槻能樂堂

能 高 砂

前シテ	尉	上野朝彦
後シテ	住吉明神	笛 赤井要佑
ツレ	姥	小鼓 清水皓祐
ワキ	阿蘇宮神主	大鼓 上野義雄
ワキツレ	従者	太鼓 中田弘美
〃	〃	
アイ	所の者	

上野朝彦	笛 赤井要佑
山田薰	小鼓 清水皓祐
廣谷和夫	大鼓 上野義雄
是川正彦	太鼓 中田弘美
森本幸治	
山下守之	

後見 野村四郎
赤松禎友

地謡 上野朝義
上野雄三
梅若猶義
野村昌司
井戸良祐
水田雄悟
齋藤信輔
伊原昇

休憩 15分

狂言 茶壺

シテ すっぱ	茂山七五三
アド 田舎者	茂山逸平
目代 綱谷正美	

後見 山下守之

舞囃子 三笑

シテ 慧遠禪師(えおんぜんじ)	野村四郎
シテ 陶淵明(とうえんめい)	上野朝義
ツレ 陸修靜(りくしゅうせい)	上野雄三

笛 赤井啓三
小鼓 清水皓祐
大鼓 上野義雄
太鼓 中田弘美

地謡 赤松禎友
梅若猶義
長山耕三
前田飛南子
赤井きよ子

休憩 15分

能 船弁慶

前シテ 静御前	上野雄介
後シテ 平知盛の亡靈	笛 赤井啓三
子方 源義経	小鼓 荒木建作
ワキ 武藏坊弁慶	大鼓 山本哲也
ワキツレ 義経の従者	太鼓 三島元太郎
〃 〃	
アイ 大物浦の船頭	

笛 赤井啓三
小鼓 荒木建作
大鼓 山本哲也
太鼓 三島元太郎

地謡 上野雄三
上野朝義
長山耕三
井戸良祐
水田雄悟
齋藤信輔
山田薰
三浦信夫

終了予定 5時頃

正陽会 (じょうようかい)

上野朝義、雄三兄弟が主催する会で、毎年1回開催。朝義の長男・朝彦、雄三の長男・雄介も交え、それぞれの研鑽の場としている。



上野朝義
うえの ともよし
シテ方観世流職分
昭和24年生まれ
職分故上野朝太郎長男
観世流25世宗家故観世
左近、観世流職分野村
四郎に師事
日本能楽会会員
大阪観世会常務理事
能楽協会大阪支部副支部長
上野松鶴会定期能主催
正陽会を主宰



上野雄三
うえの ゆうぞう
シテ方観世流準職分
昭和31年生まれ
職分故上野朝太郎三男
観世流職分野村四郎に
師事
日本能楽会会員
上野松鶴会定期能主催
正陽会を主宰



上野雄介
うえの ゆうすけ
シテ方観世流
平成2年2月生まれ
準職分上野雄三長男
観世流職分野村四郎師
に師事

本公司における写真撮影・テープ録音・携帯電話等での撮影・録音は、著作権・肖像権に触れますのでご遠慮いただきますようお願いいたします。



上野朝彦
うえの ともひこ
シテ方観世流
平成1年8月生まれ
職分上野朝義長男
観世流職分野村四郎師
に師事

高砂 たかさご

肥後国、阿蘇宮の神主・友成(ワキ)は、都へ向かう途中、播州・高砂の浦に立ち寄り、そこで松の木陰を掃き清める老夫婦に、この高砂にある松と、離れて住吉に立つ松がなぜ相生(夫婦)の松と呼ばれるのかを尋ねると、老夫婦(前シテ・ツレ)は松の謂われをさまざまに語って聞かせ、自分たちが松の精であると正体を明かし、「住吉で待っています」と告げて、小舟で沖へと消えていった。(中入)月の出とともにあとを追い、船を進めた友成が住吉の岸に着くと、澄んだ月明かりのもとに住吉明神(後シテ)が降臨し、千秋万歳を祝って颯爽と舞い、泰平の御代を祝福する。

茶壺 ちゃつぼ

都にお茶を買いに来た男だが、かなり酔っぱらって道端で寝てしまう。そこへ通りがかったすっぱはその背負っている茶壺を盗もうと、さも自分が茶壺を背負っていたかのように見せかけて背中合わせに横たわる。目が覚めた男とすっぱがそれぞれに茶壺は自分の物だと言い争うところへ、目代(代官)が通りかかり判断して貰う事に。目代は二人同時に茶の由縁を舞い語らせる。勿論男はすらすら言い踊るが、すっぱは盗み見なのでござらない。それでも判断のつかない目代は…。

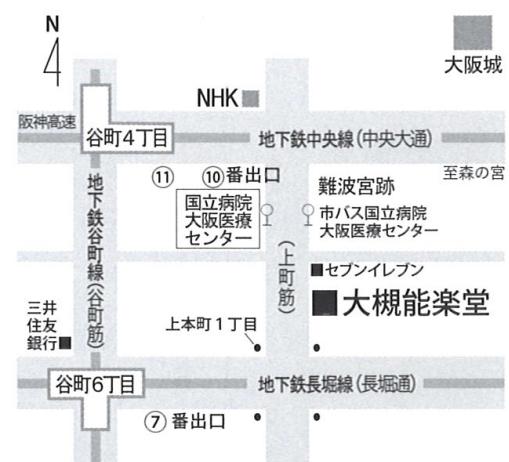
三笑 さんしょう

慧遠禪師(シテ)は、俗世を離れた山の中に住んでいる。そこへ、陶淵明と陸修靜(ツレ)が訪れ、話が盛り上がる。日頃の自戒を忘れて羽目を外し互いに大笑いする。

三人が舞う酔狂の舞。薫り高い中国絵画の画題として有名である

船弁慶 ふなべんけい

源義経(子方)が、兄・頼朝と不仲になり、西国へ逃れようと、尼崎の大物浦から船出をしようとした。そこへ、静御前(前シテ)が来て、私も連れて行って欲しいと頼むが、弁慶(ワキ)は時節柄相応しくないと、同行の静御前を都へ返すよう進言する。義経との別れを悲しむ静御前は別れの酒宴で舞い、義経を励まし涙に暮れながら見送るのだった。(中入)船に乗った一行が沖へと出てゆくと、にわかに海が荒れ始め嵐となった。見る間に波間より現れる平家一門の亡靈。中でも平知盛は長刀を抱え、「あら、めずらしや、源義経、あの時の恨み、今こそ」と激しく襲いかがるが、弁慶の懸命の祈りによって撃退し、波間に消えて失せていった。



大槻能樂堂 06-6761-8055

大阪市中央区上町A番7号

地下鉄 谷町四丁目⑩番出口 / 谷町六丁目⑦番出口

市バス 国立病院大阪医療センター